

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# ヘーゲル『精神現象学』「序説」第30節～第32節の 解明

著者	山口 誠一
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	75
ページ	1-12
発行年	2017-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/13679">http://hdl.handle.net/10114/13679</a>

# ヘーゲル『精神現象学』「序説」

## 第30節～第32節の解明

山口 誠 一

凡 例

1. 原文の隔字体は、本論稿ではイタリック体で表記し、訳文では傍点を付した。
2. 『精神現象学』第二版刊行に際し推敲された箇所は、本論稿原文直下に表示した。

### 〔8〕 表象されよく知られたこと of 思想への転換

#### 《第30節》

##### 【要旨】

観想は生活の廃棄否定である。当該の廃棄の否定の所産は表象である。表象は直接的自己の場面へ移される。実体は学的に認識される前の自己の所有である。古代ギリシャでは実体は表象へ移行した。表象はよく知られたものである。定在する精神は概念把握していない。知は表象に立ち向かう。懐疑は思惟の関心事である。

##### (1) 観想は生活の廃棄否定である。

Was auf dem Standpunkte, auf dem wir diese Bewegung hier aufnehmen, am Ganzen erspart ist, ist das Aufheben des Daseins;

1 Was ... erspart] Was dem Individuum an dieser Bewegung erspart

ここでわたしたちが上記の運動を自らにおこなうに際しての立場では全般的にやらなくてもよいことは、生活の廃棄である。

《註解》《第29節》(11)(12)(13)を受けてまとめている。アリストテレスの観想の立場では個別の知識に従う生活の煩わされることはなくなって普遍の知識を探求する。この生活の廃棄は、精神の否定性のうちで最初の否定である。

##### (2) 当該の廃棄の否定の所産は表象である。

was aber noch übrig ist und der höheren Umbildung bedarf, ist die *Vorstellung* und die

*Bekanntheit mit den Formen.*

1 ist ... bedarf,] ist,

しかし、それ以外にも、もっと高次の変形を必要とするものとして、表象と、諸形式をよく見知っているということとがある。

《註解》精神の第二の否定対象は、個別を中心とする生活からよく知られたものとして得られた普遍表象である。哲学は、よく知られた表象を認識して概念に変形する。ヘーゲルでは、通常概念とされている名称も普遍表象なのである。この節では、先の二つの節で明言されていなかった二つのことが注釈的に説明され、表象の段階が明示されている。一つは、第【29a】節で示唆されていた精神の否定性が、「生活に対しそれを廃棄するという仕事」が「最初の否定」とされていることである。もう一つは、第【29b】節で、説明されていなかったこの仕事が、ここで『精神現象学』の叙述に際しては、省かれていることが、この節の冒頭で明示されていることである。

### (3) 表象は直接的自己の場面へ移される。

Das in die Substanz zurückgenommene Dasein ist durch jene erste Negation nur erst *unmittelbar* in das Element des Selbsts versetzt;

生活はいまや実体のなかに取り戻されているのであるが、この第一の否定によっては、やっと直接的なしかたで自己という場面に移されたにすぎない。

《註解》ここからわかることは、実体は生活の廃棄という第一の否定であり、直接的自己だということである。ここでは、「実体のなかに取り戻された生活」に二つの側面を見ているのである。一つの側面は、それが、精神の最初の否定によって得られたものであるということである。もう一つの側面は、まだ、第二の否定を経っていないので、その生活は、「概念的に把握されていない直接性」であり、表象、見知られたものであるにすぎない。これは精神の普遍的自己の働きによって概念に変形されなければならない。ここでの概念は、さしあたって現象学的概念である。

### (4) 実体は学的に認識される前の自己の所有である。

dieses ihm erworbene Eigentum hat also noch denselben Charakter unbegriffener Unmittelbarkeit, unbewegter Gleichgültigkeit wie das Dasein selbst;

1 dieses ... selbst;] es hat also noch denselben Charakter der unbegriffnen Unmittelbarkeit oder unbewegten Gleichgültigkeit als das Dasein selbst,

したがって、自己が得たこの所有はなお生活そのものと同じように、概念的に把握されていない直接性、運動のない無関与さという性格をもっている。

《註解》ここから、自己が得た所有は、直接的で無関与であるという点で生活と同じである。学的認識は、この所有を概念把握し媒介するのである。

## (5) 古代ギリシャでは実体は表象へ移行した。

dieses ist so nur in die *Vorstellung* übergegangen.

1 dieses ist so nur] oder es ist nur

つまり、そのかぎりでは、この所有はただ表象へ移行したにすぎない。

《註解》 生活は自己が所有し、表象となった。さらに概念に変換しなければならない。表象と概念との関係については、《第4節》(1)と《第23節》(3)を参照されたい。

## (6) 表象はよく知られたものである。

— Zugleich ist es damit ein *Bekanntes*, ein solches, mit dem der daseiende Geist fertig geworden, worin daher seine Tätigkeit und somit sein Interesse nicht mehr ist.

1 damit]dadurch

2 der daseiende] der

したがって同時にそれは、よく知られたものである。すなわち、それは、定在する精神がそれについてはもう済んだこととしており、したがって、もはやそれに働きかけもしなければ関心も抱かないという、そうしたもののなのである。

《註解》 「定在する」は、第2版のための改訂で付加されており表象も包括している。『論理学』の定在の意味で使われている。したがって、『精神現象学』初版の *Dasein* とは意味が違う。

## (7) 定在する精神は概念把握していない。

Wenn die Tätigkeit, die mit dem *Dasein* fertig wird, selbst nur die Bewegung des besonderen, sich nicht begreifenden Geistes ist,

1 wird, ... besonderen,] wird, die unmittelbare oder daseiende Vermittlung, und hiemit die Bewegung nur des besondern

定在を相手に事を済ませてゆく働きは、それ自身、特殊的で、自己を概念把握していない精神の運動でしかない。

《註解》 ここから、定在する精神は、特殊のたあって普遍的ではないので、学の場面に到達していないことがわかる。

## (8) 知は表象に立ち向かう。

so ist dagegen das Wissen gegen die hierdurch zustande gekommene Vorstellung, gegen dies *Bekanntsein* gerichtet;

それに反し、知るということは、このようにして生じてきた表象や、それがよく知られていることに對して立ち向かう。

《註解》 ここでの「知ること」は、『精神現象学』では、「現象的意識の全領野に向けられている懷疑

主義」(Phän. S.61)である。なぜならば、「この懷疑主義はいわゆる自然表象、思想や臆見に対する絶望を実施する」(ebd.)とあるからである。「このようにして生じてきた表象」は、「いわゆる自然表象、思想や臆見」を包括している。詳細は《第26節》(6)の註解を参照されたい。

(9) 懷疑は思惟の関心事である。

es ist Tun des *allgemeinen Selbsts* und das Interesse des *Denkens*.

1 es ... *Denkens*] ist das Tun des allgemeinen Selbsts und das Interesse des Denkens

ここでの「知ること」は普遍的自己の働きであり、思惟の関心事である。

《註解》 普遍的自己とは、自己意識が思惟となっているときの自己である。それは、本文では、ストア主義そして懷疑主義の段階で現れる。まず、自己とは、精神の定在たる意識が同一性をもって存在する我であることを表現している。そして、そのような我を意識して存在するのが自己意識なのである。つぎに、そのような意識の対象である自己が、概念として自己運動するようになると自己意識は思惟となる。そして、思惟は、自己を現実存在と統一して普遍化しようとする。それが、「思惟の関心事」である。その関心事は、「理性」でのカテゴリーの探究である。なぜならば、カテゴリーとは、我と存在の統一だからである。懷疑はこのカテゴリーから発する。

## 《第31節》

### 【要旨】

よく知られているものは認識されているわけではない。認識の前提は欺瞞である。よく知られたものを前提する認識は堂々めぐりである。よく知られたことは、近世ドイツ哲学の基礎概念であり、基体主語である。表象的思考は不動の基体主語の間の往来である。上記の命題は、思いなしである。精神の生と無力な美の生とがある。精神の威力は自己否定である。

(1) よく知られているものは認識されているわけではない。

Das Bekannte überhaupt ist darum, weil es *bekannt* ist, nicht erkannt.

1 *erkannt*] erkannt

一般に、よく知られているものは、それがよく知られているからといって、認識されているわけではない。

《註解》 「よく知られているもの」とは、前の節でも出てきたように、個々の具体物ではなくて、普遍的な表象であり、古代ギリシアの哲学者によって定在から普遍的なものに仕上げられて個人(個体)の所有となり実体となっている。こうして、この普遍的表象は、所有されているという意味でよく知られているのである。ヘーゲルは、こういうよく知られているものをさらに分析し概念把握しなければならないというのである。認識に際しては、実は、よく知られたものこそが、最初に認識されなければな

らない。その上で、それ以外のものの認識がなされなければならない。その認識が、学（Wissenschaft）である。

**(2) 認識の前提は欺瞞である。**

Es ist die gewöhnlichste Selbsttäuschung wie Täuschung anderer, beim Erkennen etwas als bekannt vorauszusetzen und es sich ebenso gefallen zu lassen;

たいへんよくあることだが、認識する際に何かをよく知られているので前提すると同様に、それをそのまま受け入れるのは、他人をも自己をも欺くことである。

《註解》よく知られたものを前提するにはその前提は確実であるとされる。したがって、吟味されることなくそのまま受け入れられるのである。しかも、それは他人と自己を欺くことだとされる。なぜならば、認識はすべてを吟味すべきなのにそうならないからである。問題は、この欺瞞が生み出す根拠である。その点について、ヘーゲルは説明していない。それに対して、ニーチェは心理学的説明をしている。常識では、認識とは、未知のものを、よく知られたものに還元することであり、それによって、未知のものに出会ったときに生まれる不安がなくなるという（『悦ばしき知識』第355節）。

**(3) よく知られたものを前提する認識は堂々めぐりである。**

mit allem Hin- und Herreden kommt solches Wissen, ohne zu wissen wie ihm geschieht, nicht von der Stelle.

そのような知識は、いかにあれこれ論じ立てようとも、堂々めぐりして、どのようなことが自分に起きているかわかっていない。

《註解》認識とは、よく知られたことを根拠づけることであるが、それを前提してしまえば、よく知られたことは認識されなくて、依然としてよく知られたことのままである。それを堂々めぐりという。

**(4) よく知られたことは、近世ドイツ哲学の基礎概念であり、基体主語である。**

Das Subjekt und Objekt usf., Gott, Natur, der Verstand, die Sinnlichkeit usf. werden unbesehen als bekannt und als etwas Gültiges zugrunde gelegt und machen feste Punkte sowohl des Ausgangs als der Rückkehr aus.

主観と客観だの、神と自然だの、悟性と感性だのと、こうしたものが、吟味もされずに、よく知られたこと、当然認められるべきこととして基礎におかれ、それらが固定した点〔主語〕となって、そこから〔議論〕が発せたりそこに帰着したりする。

《註解》ここで挙げられているよく知られたことの事例は、近世ドイツ哲学の基礎概念である。主観と客観は、カントやフィヒテの超越論哲学の前提である。神と自然はスピノザやシェリングの基礎概念であり、感性と悟性は、カント『純粹理性批判』の基礎概念である。そして、このような基礎概念は、哲学命題ではなくて、表象命題で表現されるのである。表象命題では、主語は、固定した基体であり、

述語は偶有性なのである。カントのいうアプリアリな総合命題やフィヒテの根本命題もこの点では同様である。

**(5) 表象的思考は不動の基体主語の間の往来である。**

Die Bewegung geht zwischen ihnen, die unbewegt bleiben, hin und her und somit nur auf ihrer Oberfläche vor.

〔思考の〕運動は、これらの不動のままでいる諸点のあいだを往ったり来たりするだけであり、したがって、それらのものの表面上だけでうわすべりするにすぎない。

《註解》 あるときは、主語  $S^1$  に述語  $P^1$  を付けたり、別のときは、主語  $S^2$  に述語  $P^2$  を付けたりして、主語  $S^1$  と主語  $S^2$  とのあいだを往ったり来たりする。しかも、述語は、主語の偶有性にすぎない。

後期の『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』では、哲学に無前提性を要求している。「学の立場に立つために必要なことは、いま挙げた哲学的認識の有限にして主観的なありかたの中に含まれているもろもろの前提を撤廃することである。(i)制限され対立し合う悟性規定一般が確固として妥当するという前提、(ii)その思想規定の一つが自分に適合しているかどうかの尺度であるべき基体は、すでに与えられ表象されずみであるという前提、(iii)認識は、そのような既成の固定した述語の、何か与えられた基体へのたんなる関係であるという前提、(iv)認識主観と、それと合一されるべきでない客観との対立という前提。その各々の側面は、たったいまのべられた対立の場合のように、それだけで同様に確固としていて真なるものであるべきなのである。〔以上が撤廃されるべき前提である。〕」(第35節)。(ii)(iii)がここでの行文と重なる。

**(6) 上記の命題は、思いなしである。**

So besteht auch das Auffassen und Prüfen darin, zu sehen, ob jeder das von ihnen Gesagte auch in seiner Vorstellung findet, ob es ihm so scheint und bekannt ist oder nicht.

〔こうした議論について〕把握や吟味をする側にしても、そこでは、各人がそれぞれ、不動の諸点についていわれたことを、自分の表象のなかでも見出すかどうか、いわれたことが自分にもそう思われ、よく知られているとおりであるかいなかを見るのである。

《註解》 ここで、不動の諸点とは命題の主語であり、それについていわれたこととは述語である。そのような命題による把握や吟味は、各人の思いなしなのである。そして、その思いなしは、よく知られている主語の述語を自分の表象に見いだすことであり、しかもそれが、またしてもよく知られていることであるか吟味することなのである。たとえば、「我は我である」という命題で表現される我の反省について、「主語の我は主観である」と「述語のわれは客観である」という吟味がなされる。この場合、述語の主観や客観も主語と同様によく知られたことなのである。

## 《第32節》

### 【要旨】

表象の分析はよく知られているという形式の廃棄だった。分析はその表象の直接所有への遡行である。分析されたものは思想ではあるが、非現実的である。自己運動は自己否定である。分割は悟性の威力である。実体としての円環は驚嘆に値しない。分割は否定的なものの巨大な威力である。否定的なものは思考のエネルギーである。死とは非現実性である。無力な美は悟性の力を嫌悪する。精神の分裂状態に自己を見出して真理を得る。精神は否定的なものから目をそむけない。否定的なもののもとに身を置くことは存在への転換力である。主体は媒介そのものとしての実体である。

#### (1) 表象の分析はよく知られているという形式の廃棄だった。

Das *Analysieren* einer Vorstellung, wie es sonst getrieben worden, war schon nichts anderes als das Aufheben der Form ihres Bekanntseins.

表象を分析するということは、それがいままでもおこなわれてきたところでも、表象としてよく知られたことであるという形式を廃棄することにすでにほかならなかった。

《註解》ヘーゲルは、カントが『純粹理性批判』で分析命題が新しい認識をもたらさないとしたこと否定している。カントによれば、分析命題は、主語概念に含まれている内容を述語として明示するだけであるから新しい認識をもたらさない。たとえば、「物体は広がりをもっている」という命題は分析命題である。なぜならば、広がりという内容は、物体という概念の内容に含まれているからである。ということは、物体がよく知られていることであるならば、広がりもよく知られていることなのである。ところが、ヘーゲルによれば、表象の分析は認識への第一歩であるから、表象がよく知られているという形式を廃棄する。

#### (2) 分析はその表象の直接所有への遡行である。

Eine Vorstellung in ihre ursprünglichen Elemente auseinanderlegen, ist das Zurückgehen zu ihren Momenten, die wenigstens nicht die Form der vorgefundenen Vorstellung haben, sondern das unmittelbare Eigentum des Selbsts ausmachen.

ある表象をその根源をなす諸要素に分解するということは、少なくとも、たまたま見出された表象という形式をとらないで、自己の直接所有となっているところの、そうした諸契機にまでさかのぼることである。

《註解》ここでは、前文のよく知られているということが、たまたま前に見いだされたといいかえられている。その否定としての認識が自己の直接所有なのである。表象は表象する我の前に見いだされるが、分解された表象の諸契機は、我と一体である。そして、そのような我が自己であり、一体化された



諸契機は、自己の直接所有である。

### (3) 分析されたものは思想ではあるが、非現実的である。

Diese Analyse kommt zwar nur zu *Gedanken*, welche selbst bekannte, feste und ruhende Bestimmungen sind. Aber ein wesentliches Moment ist dies *Geschiedene*, Unwirkliche selbst;

この分析がゆきつくところは、なるほど思想にすぎず、それ自身よく知られていて、固定し静止した諸規定である。しかし、〔上記の〕本質的な契機は、この分割されたもの、非現実的なものそのものである。

《註解》ここから、分析が悟性の働きであることが判明する。そして主語から析出されて分割されたものは、命題の述語として思想ではあるが、よく知られていることであり、固定し静止している。しかし、この思想は、述語として、哲学命題の形式上の本質的契機なのである。そして、それは働かず動かないという点で非現実的なのである。

### (4) 自己運動は自己否定である。

denn nur darum, daß das Konkrete sich scheidet und zum Unwirklichen macht, ist es das sich Bewegende.

なぜなら、具体的なものは、自己を分割し非現実的なものとなすがゆえにこそ、みずから運動するものだからである。

《註解》自己運動するものは具体的なものであり、具体的なものの自己運動とは、自己否定である。すなわち、具体的なものが、悟性の分割によって抽象的普遍を産出するのである。

この節では、具体的なもの（現実的なもの）と非現実的なものとに、よく知られたものを分けている。前者は、表象であり、後者は、その要素であり、静止した思想だというのである。しかも、前者から後者になることによって、具体的なものが、真に現実化するのである。たとえば、『精神現象学』の「知覚」の章では、物の要素として、①多くの諸性質の〈もまた〉、②対立している諸性質の排除としての一物、③多くの諸性質が挙げられており、それぞれについて吟味が進められることによって物の静止した自己同一性が、己れ自身の反対としての力へ現実化されてゆくのである。

### (5) 分割は悟性の威力である。

Die Tätigkeit des Scheidens ist die Kraft und Arbeit des *Verstandes*, der verwundersamsten und größten oder vielmehr der absoluten Macht.

分割の働きは、何より驚嘆すべき偉大で、いや絶対的な威力である悟性の能力にして労苦である。

《註解》悟性の威力が、なにより驚嘆すべきで偉大であるとされ、絶対的であると高く評価されているのは、否定的理性と重ねられているからである。肯定的理性の総合と表裏一体であるかぎりの分析ないし分割である。

## (6) 実体としての円環は驚嘆に値しない。

Der Kreis, der in sich geschlossen ruht und als Substanz seine Momente hält, ist das unmittelbare und darum nicht verwundersame Verhältnis.

円環——自己のなかにとじこもって静止しており、実体としてその諸契機を保有するにとどまっている——は直接的であるがゆえに驚嘆することもない事態である。

《註解》 前文の「何より驚嘆すべき威力」としての「分割の働き」に対して当該文で「驚嘆することもない事態」としての円環が対置されている。円環の直接性を動かして否定するのが分割なのである。こうして運動は否定である。こうして、主体という真なるものは、静止した円環ではなくて円周運動である。その点については「真なる現実的なものは自己内円周運動である」(Phän. S. 501)といわれている。

## (7) 分割は否定的なものの巨大な威力である。

Aber daß das von seinem Umfange getrennte Akzidentelle als solches, das gebundene und nur in seinem Zusammenhange mit anderem Wirkliche ein eigenes Dasein und abgesonderte Freiheit gewinnt, ist die ungeheure Macht des Negativen;

それに対し、自己の周囲と離された偶有的なものそのもの、〔しかし〕限定され他のものと関連してだけ現実的であるものが、独自に存在し別個に自由であるということは、否定的なものという巨大な威力である。

《註解》 ここには、弁証法の過程と分離する悟性の積極的意義が示されている。①自己の周囲と離された偶有存在→②独自別個な自由存在→③他のものと関連してだけ現実存在。②は③の前段階となる否定的なものであることによって積極的意義をもち、巨大な威力とされる。

## (8) 否定的なものは思考のエネルギーである。

es ist die Energie des Denkens, des reinen Ichs.

否定的なものとは、思考の、すなわち純粹自我のエネルギーである。

《註解》 エネルギーとは、前文の巨大な威力の言い換えにすぎないが、それが、否定的なものの本性であり、思考に関わっていることが明示されている。弁証法的思考とは自己分裂から始まる自己運動である。この自己分裂の根源をエネルギーという隠喩で表現している。自己運動とエネルギーとの関係については、《第17節》(1)の註解を参照されたい。

## (9) 死とは非現実性である。

Der Tod, wenn wir jene Unwirklichkeit so nennen wollen, ist das Furchtbarste, und das Tote festzuhalten das, was die größte Kraft erfordert.

〔分割された諸規定の〕あの非現実性を死と呼ぼうとするならば、死はもっとも恐るべきものであり、

死せるものを固定することは、最大の力を必要とする。

《註解》 他のものと関連しあうことが現実性だととらえると、他のものから分離されていることは非現実性だということになる。死はこの非現実性の隠喩である。ヘーゲルの場合、現実性はこの非現実性から生ずる。そのためには、死せるものを固定することが必要である。

#### (10) 無力な美は悟性の力を嫌悪する。

Die kraftlose Schönheit haßt den Verstand, weil er ihr dies zumutet, was sie nicht vermag.  
無力な美は悟性を嫌悪する。美がなしえないことを、悟性は美に要求するからである。

《註解》 美がなしえないこととは、前文でいわれている「死せるものを固定すること」である。そのためには、「最大の力」が必要であるのに、美は無力なのである。なるほど、《第55節》でも、美は近頃のはやりとされている。しかし、当時の対応する思想家を特定すると、困難である。ノヴァーリスが対応するとされることがあるが、彼は悟性を嫌悪することはあるが、死を賛美しているのであって、忌避することはない。

#### (11) 精神の生と無力な美の生とがある。

Aber nicht das Leben, das sich vor dem Tode scheut und von der Verwüstung rein bewahrt, sondern das ihn erträgt und in ihm sich erhält, ist das Leben des Geistes.

しかし、死を忌避し、荒廃から免れてあろうとする生ではなく、死に耐え、死にながら自己を維持する生が、精神の生である。

《註解》 ここまでで死が隠喩として使われてきたので、生も使われることになる。生それ自体は、精神ではなくて、より低い段階の思考規定である。「理性」の段階では、推理の中項が分裂しているのがある。しかし、ここでは、生は、ヘーゲルの精神を無力な美から区別するために隠喩として使われている。

#### (12) 精神の分裂状態に自己を見出して真理を得る。

Er gewinnt seine Wahrheit nur, indem er in der absoluten Zerrissenheit sich selbst findet.

精神は、自己自身が絶対的に分裂した状態で自己自身を見出してこそ、自己の真理を獲得する。

《註解》 生が精神の隠喩となると、精神がまったく分裂し引き裂かれるという表現が成立する。精神の自己否定による逆転の隠喩が、絶対的分裂状態である。この場合、精神の生存は分裂の言語であることについてはこういわれている。「しかし、分裂の言語は陶冶形成のこの世界全体にとって完全な言語であり、真に現存する精神である」(Phän. S.343)。この分裂の言語を語るのが分裂した意識であり、逆転しているという意識であることについてはこういわれている。「しかし、分裂した意識は逆転しているという意識であり、しかも絶対的に逆転しているという意識である」(Phän. S.344)。この意識は高笑いでもあることについては「意識が自己を自覚し表明しながら分裂している状態は全体の混乱と自

己自身を高笑いすることであるのと同様に生存を高笑いすることである」(Phän. S. 347)といわれている。分裂は逆転であり、逆転とは、自己が自己から疎遠となり、自己自身の反対の世界となり、また、世界が分裂の言葉を通して自己となることである。その点については、こういわれている。「各自己意識は自己を自己の反対にして構想し、このようにして各自己意識を逆転させる。それと同様に自己自身からして自己に疎遠となる」(Phän. S. 344)。

**(13) 精神は否定的なものから目をそむけない。**

Diese Macht ist er nicht als das Positive, welches von dem Negativen wegsieht, wie wenn wir von etwas sagen, dies ist nichts oder falsch, und nun, damit fertig, davon weg zu irgend etwas anderem übergehen;

精神がこの威力でありうるのは、それが、否定的なものから目をそむける肯定的なものであるからではない。すなわち、わたしたちが何かあるものについて、これはつまらないとか、まちがっているとい、もうそれは済ませどけて別のものへ移ってゆく場合のようなことなのではない。

《註解》 精神の威力とは、自己分裂の力であり、自己を自己の力で否定する否定性である。

**(14) 精神の威力は自己否定である。**

sondern er ist diese Macht nur, indem er dem Negativen ins Angesicht schaut, bei ihm verweilt.

むしろ精神の威力は、否定的なものに面と向かってそれを直視し、そのもとに身を置くという、まさにこのことだけによっている。

《註解》 ここでは、否定的なものから目をそむけることに「否定的なものに面と向かって直視すること」が対置されている。また、「何かあるものについて、これはつまらないとか、まちがっているとい、もうそれは済ませどけて別のものへ移ってゆくこと」に対して、「そのもとに身を置く」ことが対置されている。

**(15) 否定的なもののもとに身を置くことは存在への転換力である。**

Dieses Verweilen ist die Zauberkraft, die es in das Sein umkehrt.

この身を置くことは、否定的なものを存在に転換する魔力である。

《註解》 たとえば、今日は晴れていないという晴れの否定のもとに身を置いても、特定の天候は存在しない。曇天も雨天も積雪も晴れを否定するからである。それに対して、鈴木さんは男性ではないという男性の否定は、鈴木さんは女性であるという特定の性別を存在させる。

**(16) 主体は媒介そのものとしての実体である。**

— Sie ist dasselbe, was oben das Subjekt genannt worden, welches darin, daß es der

Bestimmtheit in seinem Elemente Dasein gibt, die abstrakte, d.h. nur überhaupt *seiende* Unmittelbarkeit aufhebt und dadurch die wahrhafte Substanz ist, das Sein oder die Unmittelbarkeit, welche nicht die Vermittlung außer ihr hat, sondern diese selbst ist.

— この力は、さきに主体と呼ばれたのと同じものである。主体は、規定されているものを、己れの場面で定在させることにより、抽象的な、すなわち、ただ一般に存在する<sup>レ</sup>というだけの、直接性を廃棄する。このことによって主体は本当の実体なのである。すなわち、それは、存在<sup>レ</sup>であり直接性であるにしても、自分の外部に媒介を持つのでなくて、媒介そのものであるところの実体である。

#### 《註解》

本節全体の問題点を記すところなる。

- ① 精神の生の根本は、力ということにある。
  - ㊦ 分割の活動性……絶対的威力のわざ
  - ㊧ 否定的なもののもとに身を置く……魔法の力
- ② 精神の真理……自己の分裂を経て生成する。
- ③ 主体＝真なる実体＝媒介そのものである存在。

本節全体が、『精神現象学』における精神の自己知のことをいっている。この自己知を、わたしたちと意識が構成している。たとえば、規定的な否定による経験の新たな対象の発生が起こる場合、否定を行なうのは意識であり、新たな対象を発生させるのはわたしたちである。

#### 引用文献略号

Phän.: G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes* (1807). Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.